

ガザに生まれたそれだけで……

地球上のすべての社会で、子どもたちは大切にされるべき存在です。

彼らは小さく、無防備で、無垢。

だからこそ、守り、育て、愛を注ぐ存在です。

彼らの一步一步、言葉、笑顔、すべてが私たちの希望。

未来をつくる、次の世代——それが子どもたちです。

けれど今、

イスラエルの政治家や宗教的過激派の中には、

私たちパレスチナの子どもたちの死を公然と求め、

それを「喜び」として語る人々がいます。

2万人以上の子どもたちが命を奪われたというのに、

それを「誤爆」だと、本当に信じられますか？

これは明らかに、ガザの子どもたちを根絶やしにする意図的な行為です。

そう——これは、民族浄化です。

彼女の名前は、ディアナ。6歳の女の子。

イードの朝、

銀の刺繍が施されたピンクのドレスを着て、くるくると回っていました。

手には緑の風船と、お菓子の袋。

満面の笑顔で、家族みんなを幸せにしてくれました。

母のサブリーンは、お金がない中でも数週間前からこのドレスを用意し、

父のアフメドは、娘や赤ん坊の息子、近所の子どもたちにお菓子を配っていました。

私たちはその日が、

ディアナにとって「人生で最高の日」になると信じていました。

でも——それが、最後の日だったのです。

2025年3月18日 午前10時17分。

わずか42日間の不安定な停戦の後、イスラエルの空爆がディアナの住む町を襲いました。

笑い声の響いていた路地が、

爆音とともに煙と炎に包まれ、消えていきました。

サブリーンの叫び声が響きます。

「私の娘！ 私の娘……！」

何時間も瓦礫を掘り、
焼けた人形、小さなサンダル、そして――

見つかったのは、
静かに横たわる、小さなディアナの遺体。

あの笑顔は、もう、ありませんでした。
緑の風船は、空へ――誰にも気づかれずに、飛んでいきました。

国境、封鎖、決して続かない停戦……ディアナにはガザを引き裂いた政治などは理解できていませんでした。ガザは彼女がこれまで生きてきた唯一の世界であり、だから彼女は恐怖は知っていました。

アフマドとサブリーンの家に、
もうイードの祝祭はありません。
笑い声も、踊る姿も、何もかもが――失われました。

このような悲しみを、人はどうやって耐えればいいのでしょうか？
私たちには、もう未来が見えません。
小さな手、小さな命、それらを失ったあとに。

イスラエルの報道では、
この空爆は「巻き添え被害」とされました。
「武器庫を狙った」と軍は言います。

でも、ディアナの手にあったものは――
武器ではなく、風船とお菓子でした。

今月だけで、ディアナのような子どもたちが数百人も命を奪われたのです。

これは、想像を絶する恐怖です。
最も邪悪で非道なことです。

そして、それを支持する者たち。
見て見ぬふりをする者たち。
沈黙する者たち。

彼らもまた、この大量の命の損失に対し、責任を問われるべきなのです。

私は祈ります。

世界が私たちを「人間」として見る日が来ることを。

そして、イスラエルによる子どもたちの大量虐殺を止めるために。
ようやく世界が立ち上がる日が来ることを。

ガザに生まれたこと——
ただそれだけで、命を絶たれてはならない。

ガザに生まれたこと——
それは、死刑宣告ではないはずです。

ファリーダ・アルクル 2025年5月7日
(翻訳・構成 藤田ヒロシ)

オリジナル (英語)

<https://wearenotnumbers.org/palestinian-childrens-lives-matter/>

老いることのない場所

世界中の人々が長寿を願う一方で、パレスチナの若者たちは「死」を願っている。テントの中での悲惨な暮らしから逃れる唯一の道、そしてイスラエル軍の暴力によって殺された愛する人々と再び会える唯一の方法だと信じているのだ。

2025年8月20日、イスラエル軍がガザ市で地上作戦を開始すると発表したとき、多くのパレスチナ人は再び南部へ避難することを拒んだ。果てしない避難生活は、死よりも苦しい。

他者のために生きるという勇敢な選択

ガザの至るところを、飢餓が覆っている。

私の隣人、フアード・アブ・ガバルは、食料を求めてガザ人道財団（GHF）の配給所へ向かった。彼は飢えていた。

6月26日、私たちはラファの配給所へ行ったが、何も得られずに帰ってきた。翌朝、フアードはネツァリムの配給所へ行った。私は同行しなかった。私も食べ物を必要としていたが、そこでは「死」しか配られていないと知っていたからだ。

私は携帯電話でニュースを読みながら、めまいを防ぐために塩水をすすっていた。フアードがどこへ行ったのかを知ったとき、胸が締めつけられた。誰もが知っている――兵士たちは、動くものすべてを撃つ。

GHFが開くのを待つ間、フアードは現場から約10メートル離れたアル＝ワディ橋の下に身を寄せた。開門と同時にできるだけ近くにいることで、援助を得られる可能性が高くなると思ったのだ。だが、彼とその周囲にいた民間人たちは、上空からの爆撃に襲われた。

正午、フアードの家族に彼の死が知らされた。彼は食料を持ち帰るために命を捧げた。

それは彼の命が食料よりも軽かったという意味ではない。彼の人生が、それほどまでに「地獄」だったということなのだ。

息子を埋葬したあと、アブ・フアード（フアードの父）は悲しみに沈み、息子にもう会えない現実には耐えられなかった。

3日後、彼は同じ配給所へ戻った――死を求めて。息子と永遠の命の中で再会したいと願っていたのだ。彼は現場で負傷し、破片が脚を引き裂いたが、死を逃れた。

生き延びたのだ。アブ・フアードは、息子の記憶を胸に生き続けることを選んだ。

残された子どもたちのために生きるために。彼らには、未来があると信じて。

トラックの荷台に乗ってデイル・アル＝バラへ向かう途中、ある老人が私にこう言った。

「こんなみじめな暮らしを続けるくらいなら、占領軍に消されてしまった方がましだ。」

アラファト・アル＝マスリは、ガザ市北部のベイト・ハヌーン出身のパレスチナ人

だ。

家と街を失った後、ガザ市の別の地域に避難した。

彼は言う――

「再び南部のテント生活に戻るくらいなら、死を選ぶ」と。

「もし死ぬのなら、自分の街で、尊厳と誇りを保ったまま死にたい」と。

2025年4月3日、アブドゥルラフマン・シャッラは母と住まいを失った。

彼もまた死を願ったが、重傷を負った父と妹、そして瓦礫の下から引き出された幼い弟モハンマドとマーレクを世話しなければならなかった。

マーレクの体は第二度の火傷で覆われ、モハンマドの状態はさらに深刻だった。

頭蓋骨と大腿骨が折れ、顔の右半分の肉が裂けていた。

家族は治療を求めて南へ避難したが、そこに避難所も、食料も、衣服もなかった。

GHF の拠点を何度も訪れたが、いつも空振りだった。家族全員が、生きる気力を失っていた。

それでもアブドゥルラフマンは、死を願いながらも高校の最終試験のために必死に勉強した。絶望に抗うために、彼は「学び」を選んだのだ。それは勇敢な「抵抗の行為」だった。

未来を夢見て

絶え間ない避難、爆撃、飢え、テント生活という苦難の中でも、未来を夢見る人々がまだいる。

私の祖父、ヒジャージ・アル＝クルシャリは、教師をしている親族たちの助けを借りて、彼らが避難していたアル＝ザワイダのキャンプに大きな「教えるテント」を建てた。外国の団体から支援を得て、子どもたちに学用品を提供した。

子どもたちは家族の手伝いとして飲み水を運び、薪を探さねばならなかったが、それでも何百人もの生徒が教育を求めてこのテントに集まった。

学ぶことが彼らの「抵抗」となった。それは、破壊のただ中で彼らが掴んだ尊厳の証だった。

近所の人々との集まりの中で、私はイスラエル軍に殺された二人の友人のことを思い出した。だがこのとき、私は悲しみではなく「羨望」を感じた。ガザでは、私たちは「死ぬために生き」、そして「生きるために死ぬ」。誰かが死ねば、別の誰かがその記憶を生き継ぐ。ガザでは、生き延びることが裏切りのように感じられ、死ぬことが再会のように感じられるのだ。

私たちの偉大な詩人であり、作家であり、翻訳者であり、大学教授であり、活動家であり、そしてジャーナリストであったリファト・アルアライール博士は、2023年12月に暗殺された。享年43歳。それ以来、私は彼の声と記憶を生かし続けるために生きている。

ガザは――

人々が「老いることを許されない場所」だ。

それでも、死と飢え、そして想像を絶する喪失の中で、なおも「生きる」という根源的な希望にすがりつく人々がいる。

ハーレド・アル＝カルシャリ 2025年10月21日

(翻訳・構成：藤田ヒロシ)

オリジナル（英語）

<https://wearenotnumbers.org/the-place-where-people-do-not-grow-old/>